

数研 AGORA

▶高校「倫理」を学ぶということ
／上原雅文……1

▶歴史授業を創る
／陶山 浩……5

No.61

この用紙は、再生紙を使用しています。

高校「倫理」を学ぶということ

神奈川大学教授
上原 雅文

1. センター試験作題経験者・教科書執筆者として

「倫理」という科目は、センター試験での平均点も割と高く、世界史や日本史などと比べて比較的短時間で高得点の獲得が可能になると見なされているようである。確かに試験で正解を得るために記憶しなければならない「知識」の量は比較的少ないと言えるだろう。先生方には、点数を獲得させるための対策を練っていただきたい。しかしそれとともに、「倫理」という科目の面白さと有効性を伝えていただきたい。教科書執筆者であり大学教員である私からのお願いである。点数を獲得するためには「知識」＝正確な理解と暗記が必要である。そして、「倫理」という科目の面白さと有効性は「考える」姿勢を身に付けることにある。理想論を言えば、「考える」ことを通じて「知識」を定着させ、使いこなすことができるようになることを目指していただきたいのである。以下、そのために参考になりそうなことを述べたい。

私は、センター試験の作題経験者である。作題者はグループで作業を行う。個人が作成したリード文や設問がそのまま採用されることはまずなく、必ずグループ討議を経る。特にリード文は、作題者が自分の専門性を発揮しようとして論文調になりがちである。それに対して、グループでの討議では、あくまでも高校生目線での文章なのかどうかをチェック

される。設問においても、問おうとしている内容が何社の教科書に記述されているか、それぞれの教科書でどういう説明文章になっているのかを基準にしつつ、専門的にも正確な文章かどうかチェックされる。討議のたびに、作題者は自分の作っている問題に修正を入れて完成させていくわけである。

作題が教科書の記述に従属しているようだが、そうではない。教科書の記述のレベルに合わせつつ、そして、大学で研究している最新の学術レベルに少しでも近づける、これが作題者グループの目標になる。われわれはその目標を「教科書の内容を半歩進める」と呼んでいた。「半歩」進めるならば、教科書の内容も変わっていくだろうという目論みもある。設問の中で思想家の文章を読ませる問題があるのはそういう意図からでもある。実際センター試験の内容は教科書執筆に際して参考にされる。センター試験作問グループは、すべての教科書に目配りしつつ、教科書よりも正確な説明文章に心掛ける。そのことで教科書全体の内容の底上げを狙い、そして実際底上げに貢献しているといえよう。

その意味で、センター試験の過去問は点数獲得のために大いに利用できるはずである。特に設問の選択肢文章すべてを検討し、正答と誤答の理由をしっかりと理解することで、かなりの点数は獲得できるはずである。

多くの設問は思想家の思想についての正確な理解

(「知識」)を求めている。まずは正確な理解が重要なのである。しかし、作題者がそれ以上に重視しているのは、「知識」を活用したリード文における高校生へのメッセージであり、その文章を読んだ高校生に「考える」姿勢を促すことである。言い換えれば、過去の思想を、現代のわれわれが生きていく上で抱えている様々な問題に関係づけて「考える」姿勢を促すこと、である。「考える」内容は、試験時間内に考えて答えが出るようなものではない。リード文の趣旨を問う設問(あるいは短文穴埋め問題)はいわば読解問題であり、教科書レベルの基礎知識と読解力があれば解けるだろう。しかしリード文が示そうとしている「考える」内容は、誰もが考える身近な問題であるにもかかわらず、容易に解きたい問題であり、高校生各自が生きていく中で考え続けてもらいたい内容なのである。実は、作題者は(グループ討議でも)、このリード文作成に多くの時間を割いている。「倫理」という科目は単なる暗記科目ではなく、哲学・倫理学であり、従来の知識や価値観を「疑い、考える」ことが最も重要であると、作題者たちが考えているからである。ほとんどの作題者はそれぞれの大学で哲学や倫理学を講義し、学生に「考える」姿勢を身に付けさせようとしている。作題者は、一定のテーマを設定したリード文を書くことによって、それと同じことを、高校生に向けて伝えようとしているのである。「考える」姿勢を身に付けさせるためにも、過去問のリード文を授業で活用していただきたいと切に思う。

私は以上のような作題経験を経た上で教科書を執筆し、センター試験作題の経験を活かした内容を狙った。しかし、教科書としての字数制限があるのに書きたいことは多く、かつ分かりやすく書こうとすれば字数が増えてしまう。しかも思想家はキーワードとともに網羅しなければならぬ。さらに、メッセージを入れようすれば客観的な教科書記述から逸脱してしまう……こうした様々なジレンマの中で格闘したというのが本音である。思想や用語については正確な説明ができたと自負しているが、どれだけ作題経験が活かされたかは心許ない。しかし教科書の役割が知識の正確な記述と網羅性にあると見るならば、説明に割くことができる字数の少なさは別に、その役割は十分果たしていると思う。この網羅性が「倫理」教科書の重要な利点である。

実は、センター試験作題者がいくつかの「倫理」

教科書を読んで必ずといっていいほど思うことが二点ある。一つ目はよい点。それは網羅性である。「倫理」教科書は、古代ギリシアから現代のポスト構造主義に至るまでの思想史をコンパクトに記述し、しかもユダヤ教・キリスト教・イスラーム思想・仏教・儒教など、西洋と東洋の主な宗教をも記述し(様々な観点からの比較も行い)、外来思想を受容してきた日本思想の通史をも含めている。現代的な問題である生命倫理・環境倫理などの応用倫理の問題についても考えさせるように工夫してある。このような網羅的な内容をもつ、いわば「世界思想史」といっていいほどの内容をもつ書籍は、専門書籍でも一般書籍でもほとんどない。大学の教養の授業で比較思想を講義しようとして教科書を探しても、このような網羅的な内容をもつ思想史教科書は見当たらない。実に貴重な書籍なのである。現代のグローバル社会においては、情報や物資の流通のグローバル化は進展しているが、宗教・思想面ではなかなか対話が進まず、むしろ宗教・民族・国家間の対立が激化している。こういう時代だからこそ、日本史・世界史の知識だけではなく、世界の様々な思想・宗教とその歴史を知る必要がある。異文化理解と自文化理解、そして対話や文化交流がますます必要になっている。「倫理」教科書は、そのためにも活用できる書籍であり、「倫理」という授業は生徒の生涯において貴重な時間になり得る。大学の授業では、教養の授業であっても、その多くがギリシア哲学や近代哲学など、時代や地域に限定された内容で構成されており、網羅的・比較思想的な授業はほとんどないからである。

センター試験作題者が思うことの二つ目は、悪い点なのだが、教科書が薄く記述が浅いということである。そのため、おそらく高校生が読んだだけでは哲学・倫理学の面白さや有効性(「考える」ことの重要性)が伝わらないのではないかと、という点である。問題を作成する際には、設問がどうしても過去問と同じようなものになってしまうという苦勞を抱えることになる(だからこそ点数を獲得しやすい科目なのであるが)。これは網羅性と表裏の関係にあると言ってもよく、致し方ない点ではある。

そこで作題者は「考える」ことに主眼を置いたりリード文に力を注ぐことになるのだが、やはりそこでも字数制限があり、思いのままに書けるわけではない。また、リード文を試験時間中に読んだだけで(過去問を解くにせよ)、高校生が「考える」姿勢を

身に付けることは期待できないと考えてしまう。実は、この作題者たちの欲求不満から生まれたシリーズ本がある。それが『高校倫理からの哲学』シリーズ(5冊、岩波書店)である。執筆者たちの多くは苦勞してリード文を作成したセンター試験作題経験者であり、高校生目線での文章訓練を経ている。つまり、このシリーズ本は、高校倫理の知識があれば読める、高校生目線で書かれた哲学入門書と言っている。しかし、目指したのは、高校倫理のレベルにとどまるものではなく、大学教養もしくはそれ以上へのレベルアップである。センター試験作題において「半歩」で禁欲していた内容を越えて、「数歩」先まで導こうとしている。「高校倫理からの」というシリーズの表題が示しているように、執筆者たちは「倫理」教科書の網羅性を活用して、本来の「考える」哲学・倫理学へと誘おうとしている。「倫理」を学ぶ高校生にとっては、教科書に記述されている思想家の言葉が、現代の身近な問題を「考える」際にどのように活用されるかが読み取れるはずである。時系列の思想史ではなく、「生きるとは」「知るとは」「正義とは」「自由とは」「災害に向きあう」という問題中心の5冊に構成してあるため、「考える」材料としての有効性を高めている。むしろ、正確な思想の理解(知識)を深めるためにも役立つものとなっている。このシリーズ本を読むことで、教科書の記述がより面白く読めるようにもなるだろう。高校生に是非読んで欲しい本であるが、まずは先生方に授業で活用していただきたい。高校倫理学習課程との対応表があり、教科書の箇所に対応する箇所を拾い読み活用することも容易であり、便利かと思う。

2. 哲学としての倫理学

私は大学で「哲学」「倫理学」「日本思想史」などを担当している。「哲学」「倫理学」は教養科目であり、理系の学生も多く受講している。そのうち、高校「倫理」の履修経験者はごくわずかである。経験者の中の一部の学生が、高校の「倫理」が面白かったので、という理由で履修してくる。しかし経験者であれ未経験者であれ、ほぼ全員の学生が、倫理学という学問が哲学の一分野であるということを知らない。ここでは、哲学と倫理学の両者の関係を確認し、改めて高校「倫理」の意味を考えたい。

言うまでもなく、哲学(ギリシア語のフィロソフィア)とは「知を愛し求める」という営みの意である。

故に場合によって「哲学する(愛知する)」という動詞を用いる人もいる。哲学という妙な訳語は、幕末・明治期に由来する。まず、philosophyを「賢・哲を希う学」と理解したため、「希哲学」「希賢学」などという訳語が生まれた。「知を愛し求める」という原義に近いと言える。しかし、いつの間にか「希」の字が省略されて「哲学」として流布することになってしまう。省略されなかった方がよかったように思える。ともあれ「知を愛し求める」は、「知の探究」と言い換えることができる。それは、既存の「知・知識」を学ぶ、という意味ではない。既存の知を「疑い、考える」ことによって、より真実の知を求め続ける、という意味である。ソクラテスの「無知の知(自覚)」が哲学の端緒としていまだに重視されるのはそういう理由である。

何についての知を探究するのかによって、哲学がいくつかの分野に分かれる。古代ギリシア以来のオーソドックスな分類によれば、存在・認識・価値の3分野である。価値の分野とは、「よい」とは何かを探究する領域であり、生きていく上での「よさ」とは何か、「よく」生きるとはどういうことか、を探究する分野がethics(倫理学)である(価値の分野の中には「美」とは何かを問う美学も含まれている)。

存在と認識の分野は、それぞれ存在論・認識論として、現代でも倫理学と並ぶ哲学の領域として現存している。高校の「倫理」という科目の内容は、存在論も認識論も含んでいる。例えば、プラトンのイデア論やアリストテレスの形相・質料などはれっきとした存在論である。イデアを知ることが真理を知ることであるという内容やカントのコペルニクス的転回は代表的な認識論である。

故に、高校「倫理」の内容はほぼ「倫理学に重点を置いた哲学史」であると言っているだろう。哲学史・倫理学史・倫理思想史を学ぶことを通じて、「疑い、考える」姿勢(「哲学する」姿勢)を身に付けること。これが、高校「倫理」の授業を受講する生徒たちに求められていることだと思う。

ちなみに、哲学と倫理学の関係について説明する際に、私が講義で使っている比喩を紹介する。

■哲学(知を愛し求める)⇒音楽(音を楽しむ)

■哲学のジャンルに倫理学や認識論などがある

⇒音楽のジャンルにクラシックやロックがある。

一応、この比喩で大学生は納得する。

次に、哲学としての倫理学について少し詳しく見ていく。

英語のethicsは倫理とも倫理学とも訳される。倫理の語原はギリシア語のエーティカであるが、エーティカは、習慣や習俗を意味するエトスと、それによって形成された人柄や性格を意味するエートスという言葉に由来する。つまりエーティカ（倫理）は、共同体における習慣や規範・ルール（道徳や法律）と、個々人の生のあり方(生き方、生きがい、生きる意味や目的)という二面的な「よさ」を意味している。

一方、漢字の「倫」は「(動物とは異なる)人としてのまとまり、人々のあつまり」の意味を表し、「理」は「すじみち、物事を存立させていることわり」の意味を表している。「物理」という辞が、「物体を存立させていることわり」を表していると同様に、「倫理」という辞は、「動物とは異なる人として生き、あつまって生きていることを存立させていることわり」を表している。ここでも共同体におけることわりと、人として生きることわり、という二面的なことわり(「よさ」)が含意されているわけである。ギリシア語のエーティカとほぼ同じような意味を表していると見てよく、訳語としてふさわしいだろう。

人は誰しも、共同体のルールや規範・法を守り(守ろうとし)、他者と関係を持ち、生きがいや生きる目的をもって(もとうとして)生きている。言い換えれば、倫理を身に付けて、あるいは倫理に従って生きている。だからこそ人であり得ているのである。そして倫理学とは、在来の(身に付き、従っている)倫理を「疑い、考える」ことによって、より真実の倫理を求め続ける、という哲学としての営みである。今よりも、より「よく」生きようとするための思索である。

倫理学はとても身近な学問である。人は時に既存のルールや規範が本当に正しいのか疑いをもつ(校則への疑問は高校生にとって身近だろう)。友人関係や家族関係での悩みは、個人としての生き方・考え方や他者のそれとのズレから生じる。目指していたことの挫折がきっかけとなって、生きがいや生きる意味を失い、落ち込み、悩むこともある。疑いや悩み、それが、在来の倫理に対する問いの始まりであり、倫理について「疑い、考える」という、哲学としての倫理学の始まりである。より「よく」生きようとするからこそ、人は疑い、悩み、考える。そ

の意味で、高校生であっても既に倫理学を無自覚に営んでいると言っているのだ。

無自覚な倫理学を自覚的に営もうとするなら、倫理学史・倫理思想史が不可欠となる。なぜなら、在来の、身に付け従っている倫理に批判的になる(別の、より「よい」倫理を求める)のであるから、それを正確に知らなければならない。つまり在来の倫理の形成過程(歴史)を知る必要があるわけだ。日本人の倫理は、神道・仏教・儒学・西洋思想など様々な要素があって重層的である(数研出版教科書『倫理』pp.182~183「日本思想の流れと伝統文化」)。そのあり方を知らなければ、倫理学も机上の空論になってしまう可能性がある。また、日本人の倫理とは異なる西洋の倫理や倫理学について理解することは、より「よい」倫理を考えるための材料ともなる。さらに、先人たちの哲学としての倫理学の営みを学ぶことは、倫理学の方法(「考える」方法)を学ぶことでもある。思想家の言葉やその思想が、自分自身で「考える」際の言葉として活用でき、また「考える」手がかりとして活用できるようになる。それによって、いわば、自覚的・積極的に悩むことが可能になるのである。具体的な例は『高校倫理からの哲学』シリーズで多く扱っているので、ぜひ参照していただきたい。

私が大学の教養科目「倫理学」で、学生たちに求めているのも基本的にはこれと同じである。ちなみに私は、きわめて身近な問題として、授業中の私語について、それがなぜいけないことなのかを考えさせる。いけないことだという押しつけは一切しない。ベンサムやカントの理論などを紹介して、それを適用させて考えさせ、議論させるだけである(結果として私語は一切なくなるのであるが)。その過程の中で、学生は、私語だけではなく、様々な身近な問題(当然と思っていた価値観など)について「哲学する」ことの面白さと有効性を感じていく。必ず具体例で考えさせることを通じて、学生は、様々な考え方があり答えの出し方があることを知っていく。究極的には答えがない倫理学の問いがあることも知っていく。学生が考える姿勢を身に付けることが出来れば、私の授業の目的は達せられたことになる。